

【資料紹介】鍋島伊都子『大磯日記』（明治三十年）

小田部 雄次（静岡福祉大学名誉教授）

『大磯日記』は旧佐賀鍋島藩主であった鍋島直大侯爵の次女の伊都子の鍋島家の大磯別荘滞在中の日記である。明治三十年（一八九七）二月十四日から三月二十八日までのおよそ一カ月半ほどの滞在であった。このころ鍋島家は、春は大磯、夏は日光に滞在していたようで、伊都子には同年七月二十八日から八月二十九日までと、翌年七月二十九日から八月二十九日までの『日光日記』もある。

また伊都子には、明治三十二年一月一日から昭和五十一年（一九七六）六月三日まで、一部空白はあるが、七十七年六カ月におよびほぼ毎日綴った日記があり、これらの一部はすでに拙著『梨本宮伊都子妃日記』（小学館一九九一年）で紹介した。

これらの日記を記した伊都子は、明治三十三年二月二十八日に皇族の梨本宮守正王と結婚して、梨本宮妃となつて、明治、大正、昭和の三代の天皇の時代を天皇皇后や各皇族はじめ華族らと親密な交流を築いてきた。その断片も日記の随所にみられ、かつての上層階級のライフスタイルの一端を知ることができる。

伊都子は昭和二十二年十月二十四日に皇籍離脱するまで皇族妃の地位にあり、その後、一般市民となり、一代で華族令嬢、皇族妃、一般市民という稀有の生涯を送った女性であった。こうした変転の人生を送った伊都子の日記は、日本の近現代史の歩みを見つめなおす上でも重要なものといえる。

なお伊都子は七十七年におよぶ日々の日記のほかにも、皇族妃として欧州王室を訪問した際の日記、関東大震災のときの日記のほか、戦時中の体

験をまとめた記録など、数多くの日記や手記を残した。なかでも『大磯日記』は日々の日記よりも早い時期の日記であり、現存する伊都子の日記ではもっとも若い時代のものといえる。

『大磯日記』の前年の明治二十九年十月十三日に満十五歳の伊都子は梨本宮守正王と婚約しており、鍋島伊都子として最後の独身時代を過ごしていたころの記録ともなっている。

大磯には明治十八年に軍医総監の松本順が国民の健康管理のために照ヶ崎に開設した日本最初の海水浴場があった。明治二十年には大磯に東海道線の停車場ができ、禰龍館や招仙閣という旅館も建ち、海水浴客も増えた。

大磯には伊藤博文の滄浪閣はじめ政財界の実力者たちの別邸も多く建ち、鍋島家も明治二十九年ごろに別荘を建てたと伝えられる。伊都子の『大磯日記』は鍋島別邸ができた翌年の春のことであり、使いはじめたばかりのころといえる。また春なので海水浴ではなく、温暖な春の海岸で保養するのが目的だったようだ。

『大磯日記』には、両親である鍋島直大、栄子のほか、当時四歳の妹の尚子や鍋島家の職員たちの動きが記される。両親はしばしば宮中の用務などで東京に戻ったり、姻戚である鎌倉の前田家別荘に向いたりした。伊都子も平塚まで松露とりにでかけるなど、大磯を拠点に東海道線沿線の地にでかけていた様子がうかがえる。

ちなみに、伊都子は気温を華氏で書いている。日記には華氏で「六十五度」、「五十一度」、「三十二度」などとあり、摂氏ではそれぞれ「十八・三度」、「十・六度」、「零度」となる。

なお、日記原文には句読点や濁点などがない箇所もあるが、読みやすさを重視して、適宜、句読点や濁点を付した。誤記や記載漏れなどは【】で修正した。日記中の人物などについてはわかる範囲で簡単な注を付した。

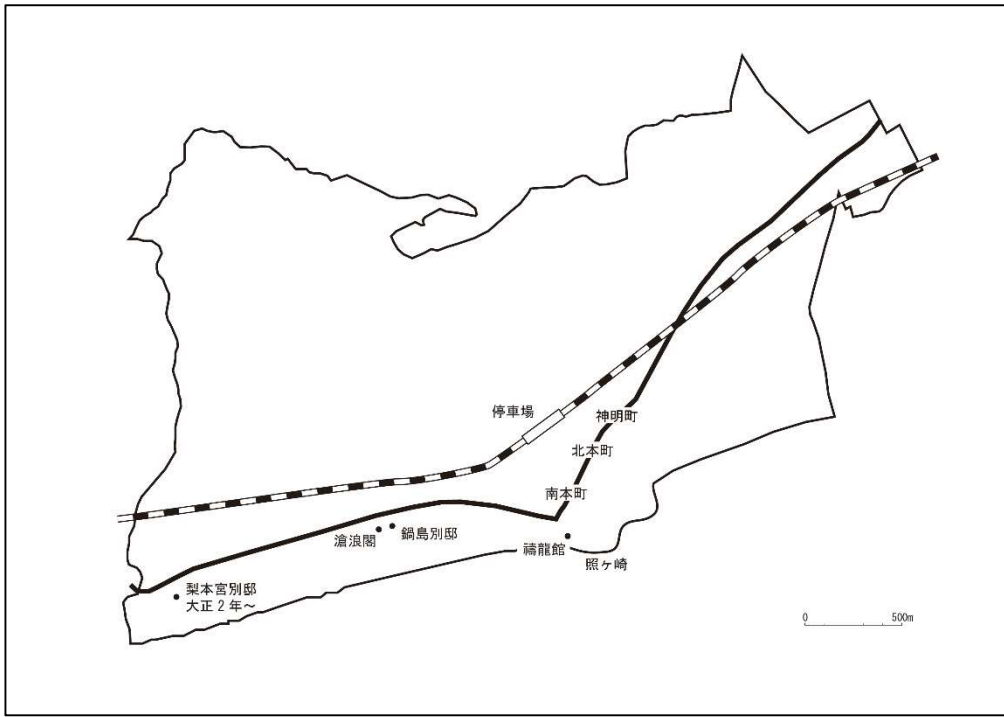


図 明治30年ごろの大磯町

明治卅年二月十四日より三月二十八日迄 大磯日記

十四日(日) 六十五度

午後十二時半の汽車にて東京を出立し、同二時四十八分に大磯駅に着き、それより人力きにて御別荘きしてはしり、七分間にて着す。それよりいろいろの人御あいさつに出、いろいろして夜に入。

*人力 大磯駅から鍋島別荘まで人力車で七分だった。

*御別荘 鍋島侯爵家の別荘。敷地は西小磯稻荷松の畑や山林で四七二三坪あったという。この明治三十年には皇太子嘉仁(のち大正天皇)が来邸し「迎鶴楼」と名づけられた(鈴木昇『大磯の今昔(八)』)。

十五日(月)

天気大によし、朝起いで直に海岸に行。此日は常宮周宮き両宮は三嶋きへ御出にて、東京を七時三十分の汽車にて御出ゆゑ、大磯九時半ころ御とまりになり、御両親様きズテーションまで御見送りになる。あとはつまらぬこと故かきげず。

*常宮周宮 明治天皇皇女の昌子内親王と房子内親王。それぞれ明治二十一年生まれ、明治二十三年生まれで、明治十五年生まれの伊都子より六歳下、八歳下。のち、それぞれ竹田宮恒久王妃、北白川宮成久王妃となる。

*三嶋 三嶋には三嶋大社があった。当時は東海道線に三嶋駅はなく、多くは沼津経由だった。

*御両親様 鍋島直大と栄子。

十六日

別に此日はかく事もなければやめ。

十七日

朝おき見ればめづらしく雪降て、あたりの山々もいわれぬ美しきなりけり。午後一時ころより海岸をあるき禱龍かん*【へ】まいり歌子先生の所を御見舞し、となりの松平千代子様のところにいろく御話申上、二時半過に家に帰へる。

* 禱龍かん 禱龍館。大磯町の旅館。大磯停車場の南方、海岸側にあった。

* 歌子 中島歌子。私塾「萩の塾」の創設者で、樋口一葉の師として知られる。夫が幕末の天狗党の乱に加担した罪で自害するなど水戸の国学者とのつながりがあった。また維新後に御歌掛から御歌所長となる高崎正風の知遇を受けるなどして、明治期の上流階級の子女などに和歌や書を指南するようになり、鍋島家もその指導を受けていた。弘化元年十二月十四日（一八四四年一月二十一日）生まれで、当時はかぞえ五十三歳であった。のち明治三十六年に亡くなる。

* 松平千代子 彦根藩主で大老であった井伊直弼の次女の千代子か？高松藩主松平頼聡の正室であったが幕末の動乱期にあって一度離婚し、再び復縁した。はじめ弥千代、復縁して於千代としたがのちに千代子と称する。弘化三年一月十六日（一八四六年二月十一日）生まれで、当時はかぞえ五十二歳。昭和二年に亡くなった。

十八日

此日は御両親様一寸東京へ御帰りになる。其故は父上様御代拝の為なり。十時二十一分大磯発にて御出になる。われ御見送りにステーションまで行しに風ひどくして目も明られぬほどなりき。それよりかへりに町の方へ行、芝居の前を通り海岸へ出、家にかへる。午後はこもりきり也。

十九日 大雪

又々おき見れば大雪也。此日はまた御両親様大磯へ御帰へりになるゆゑ、

朝はかみをそろゑて御まち申上る。午後四時七分に御着になる。

廿日 同

なほく雪つもりし故おきて少したち庭に出、雪の尺を見んとておりしに、くじら七寸まどあり。午後は雪だるまをこしらへなどしてあそぶ。

* くじら七寸 くじら尺一寸は約三・八センチ。七寸は約二六・五センチ。

廿一日 天気

此日は別にめづらしき事なし。只海岸へいで石などひろふ也。

廿二日 少し天気

此日は午後より運動にいで禱龍かんの岩の所まで行しに、歌子先生御よび被成、又先生の所に上り、いろくなものいただき、かへり道にてお客とて御父様おさきに御かへりになる。われくも御あとよりかへりてみれば、御客は学習院の先生森義則といふ人なり。又もひとり田中一郎なり。それより掛時計をなほしたり、海岸へ行たりして五時四十九分にてかへりたり。

廿三日 くもり

此日は朝おきれば空くもりて雨もようなりし故、そとには出られずとて、かみなどそろへ湯へもはいり居れば、少しばらくと雨降いだしたり。午後はやみし故いざれば又降いだす。一日こもりきりなり。

二十四日 天気大によし

午前九時半ごろ一寸海岸へ行て見れば、西の方に舟あがりければ見にゆき

たり。見ればあまたの魚とれて、中にかにとたことあり。それをもらひつゝかへりたり。午後は十二時過に出かけ、山ての方を三時過まであるき、よく運動をしてかへる。

二十五日 天気よし 風南なり

起きていろくゝの事し、午後山へ行。

二十六日 天気よし

なにもかくべき事なければやめ。

二十七日 天気大によし

此日は又御両親様東京へ御帰りゆゑ、亭【停】車場まで御見送りに行。十二時四十九分大磯発にて御出立になる。かへりに禱龍かんの方へ行、歌子様御宅に御菓子など御だしになる。それより家にかへる。

二十八日 天気

午後一時頃より海岸へ行、皆々打すわり、横になつたり何かしていたりしに、いつ*の後よりしほ来り、にぐる間もなくひざから下はしほだらけになり、いそぎ家にかへる。あとの人々は足位なもので、さほど多くはあらざりき。それより又三時頃より田の方へゆき、少しつみ草したり。少し寒し。

*いつ 伊都子のこと。

三月一日 天気

此日はかみをそろへ、午後三時よりつみ草に行。たくさんとりきたり。

二日 天気

風ありて寒し。午後より海岸へ行、小磯の方、橋本氏*の別荘の所までゆき、町の方へ出、いそぎ家にかへる。

*橋本氏 橋本綱常軍医総監。

三日 天気

今日御両親様、東京より御帰りになる。東京を七時に出るのにて、此地、九時四十八分に御着になる。ステーションまで御むかへに行、御道同【同道】して家にかへり見れば歌子様御出になり、桜もちなど下さる。師の君*も三時まへに私の手習ひして直に御かへりになる。

*師の君 中島歌子のこと。

四日 天気

此日は歌子君、お菓子をこしらへ上るとの事ゆへ、あちこち運動し、野道よりすずしと浅野*の別邸の方へ行、三嶋*の所よりお茶などもらひ、また海岸の方へ出、家にかへる。凡三時間あるく。かへりて見れば歌子【様】はいま来た所にて、いなりまんぢゆう*をこしらへ下さる。

*浅野 浅野総一郎。浅野財閥創設者、セメント王と称された。

*三嶋 三嶋弥太郎。三嶋通庸子爵の長男。当時は貴族院議員。のち横浜正金銀行頭取、日本銀行総裁などをつとめる。

*いなりまんぢゆう あんドーナツのこと。

五日 朝 天気

此日は昼飯たべおわりけるととき、鶺鴒婦人【夫人】まいる。それより方ぼう見、海岸へいづ。少しして雨ふりいだす。いそぎ禱龍か【ん】へ行、歌子様

の所へはいると御ちそふ、やきいもなり。皆たべて雨晴ければいそいへにかへり、鶉飼も五時の汽車にて御かへりになる。

*いそ いそいで

六日 天気

午後一時ころより海岸へ出、亭【停】車場の方へ行。山へのぼり、此山は商人のとちなりとて今、家たちかけなり。それより野道を行、つくしなどを多くとりかへる。

七日 天気

此日は午後より海岸に出、禱龍かんの方まで行。三時まで居、家にかへる。

八日 くもり

朝少しくもりたれど、此日御父上様御墓参の為一寸御帰京になる。午後運動出、かへり見れば歌子様御いとまごひにお出になる。明日よりかへるとの事、それより御手習ひしていろくくの事し、夜七時ころ禱龍かんへ御かへりになる。

九日 雨 五十一度

朝おきみれば雨なり。此日歌子様御帰故、運動かたく御見送に行つもりなるに、雨終日降いて外出出来ず、とうくくもり也。

十日 天気 暖 七十二度

午後運動かたく町の写真や*に行、尚子*と一所にうつす。此日出がけに田中永昌乗り、父上様道より御かへりになる。それより亭【停】車場へ行、

永昌かへるを見送、かへればめづらしく山木の花来る。

*写真や 遠藤写真館か。大磯町の南本町にあった。

*尚子(ひさこ) 鍋島直大六女。伊都子の妹。明治二十七年生まれで、のち旧大和郡山藩主家で伯爵となった柳沢保申(やすのぶ)の長男である保承(やすつぐ)と結婚。

*田中永昌 天保十四年(一八四三)生まれ。佐賀県士族。鍋島直大侯爵家扶。石川島造船所監査役。

十一日 【記載なく空欄】

十二日 くもり

午後少し運だうに出、木細工屋に行、其内(すま*)は写真うつしにゆく。

*すま 鍋島家の職員。

十三日 天気

天気なれど風つよく、一寸父上様と海岸へ出る。母上様は禱龍かんへ御出になる。

十四日 天気 三十二度

午後一時すぎに松平様* 昭子様* 千代子様と昭子様の御子様と御出になる。

*松平様 旧讃岐高松藩主家の松平頼聡(よりとし)伯爵と思われるが不明。なお、

千代子は頼聡夫人。

*昭子様 字は時子とも読める。昭子は松平頼聡八男の頼寿(よりなが)の妻であるが、明治十六年生まれで当時は十四歳であり、昭子かどうか疑問は残る。

十五日 大雨

此日は午前大雨なりしに三時ころより雨晴、今、すま、あい、みほ、とき*
皆写真にゆく。

*すま、あい、みほ、とき 鍋島家の職員。

十六日 少し雨

朝少しあめふる。午後よりはれる。運どうに出る。

十七日 天気

今日は父上様、沼津*へ御機嫌うかがひに御出になるつもりにて、七時五十分との事なりしが、此車は人のせぬとの事故、しかたなく八時の車にかま倉*へ御出になる。

*沼津 沼津御用邸と思われるが、当時、明治天皇と昭憲皇太后は京都に滞在中であり、嘉仁親王（のち大正天皇）は葉山御用邸に滞在中であった。

*かま倉 前田利嗣侯爵の別荘があった。別荘は一度焼失したが、のちに利嗣を継いだ利為が洋風に全面改築し、現在は鎌倉文学館となっている。なお鍋島直大の長女で伊都子の姉である朗子は利嗣夫人で、鍋島家と前田家は姻戚であった。

十八日 天気 六十九度

今日は又父上様御帰京遊ばさる。後、十二時四十八分の車にて母上様、伊都子、尚子皆平塚へ松露*をとりに行。多くとれ、家にかへりざるにみ入ればおほかた三合のよ【余】ありたり。

*松露（しょうろ） 担子菌類の食用きのこ。春と秋に松林中に生じる。通常は地中に埋もれているが、なかば地上にでていられることもある。球状で傘茎の区別はない。吸物の実などにした。昭憲皇太后などもしばしば沼津御用邸周辺の松林で松

露とりに興じたことが知られる。

十九日 又雨と雪

今日、父上様大磯へ御出になる。四時七分に御着になる。

二十日 又雨

此日は外出なし、家にこもる。

二十一日 晴

風ひどく又外出なし。

二十二日 天気

今日は前田様*十一時二十一分にて御着になるにて、亭【停】車場まで御出迎ひに行。それより家に行、いろいろ御みやげいただき、方ぼう御らん遊ばしおひるめし上り、午後より海岸へ行、うらの松ばらにをれば、慈貞院様御出になる。それよりかへり御やつをめし上り、そろくして前田様御かへりになるにて、又かきだしてステーションまで御見送りに行、御なごりおしく存候。

*前田様 前田利嗣侯爵。利嗣は明治七年に加賀前田家を継ぎ、明治十五年に夫人の宣と離別し、その後、鍋島直大長女の朗子と再婚した。

*慈貞院様 松平慈貞院（健子・貢姫）。天保十年（一八三九）、十代鍋島直正の長女として誕生。直大の姉で、伊都子の伯母にあたる。七歳の時、直正の正室盛姫により江戸へ呼び寄せられ養育された。安政二年（一八五五）、川越藩主松平直侯と結婚したが、六年後に直侯は病没。慶応四年（一八六八）、貢姫は江戸を発ち武雄での転地療養の後、佐賀城で直正の継室筆姫らと過ごした。明治四年（一八七一）直正の

葬儀に上京して以来、鍋島家の庇護の下で八十歳の天寿を全うし、大正七年（一九一八）五月に亡くなった。

二十三日 晴

此日あまり天気よければ、御伯母様*と御一所に平塚へ松露とりに十二時四十八分にて行。行みればたく山あつてうれしく、そら又くくくといふやうに出、五時五十分にて大磯へかへる。

* 御伯母様 慈貞院。

二十五日 天気

今日のかま倉へ行。八時二十八分にて出かけ、鎌倉へ九時ころに着す。それより少しの内御話をしてお庭へ行。かへりて御せんをいただき、それより又つみくさに行、かへりておやつをたべ、そろくしてかへる。又はんけちをふりなどしてかへりぬ。

二十六日 雨

終日降つづき、外出なし。

二十七日 くもり

朝まだ少し降いれればいかがと思ひいたりしに、午後より晴、おなごりに一寸運動に出る。少し村の方へ行けば道わるく、どろの中に下駄はまり、たはたひもなく*よごれたり。

* たはたひもなく 「たわいもなく」の意か？

二十八日 雨

またく雨にていかがとあんじいたりしに、午後はいよいよ出立となりたれば、天気もよくなり、いさぎよくいでたちたり。五時ころ東京なる家に着したり。めでしく。